

第六夜 十一月にふる雨

秋も深まり冬の足音が聞こえ始める時節になると、三時を過ぎれば日差しは心許なく、四時には暮れ始め、五時には宵闇が降りてくる。それが如何にも赤提灯に似つかわしい。

ましてや今日みたいにも雨の降る日は、街ぐるみで夜を待ちわびているかのようには昼を過ぎた頃からほの暗い。

夜がすっかりその帳を降ろした五時十分。朱の提灯の中、墨痕鮮やかに浮かび上がった『酔鏡』の文字を目指して黒い雨傘を差した人影が路地をやってくる。何か良いことでもあったのか男の足取りは軽快に水溜まりを避けながら瞬く間に店の前に辿り着き、真新しい格子戸をカラリと引き開けた。

「いらっしやい」

小太りの主人が声を張る。男は店の中を見回して誰もいないことを確かめると満足げに頷いた。

「一番ビール、ゲットやな」

主人はユウヤんに言っただけで笑った。ジャンパーを脱ぐと適当に丸めてビールケースに置く。カウンターのど真ん中の丸椅子に腰をおろすと入口を見遣ってユウヤんは口を開いた。

「格子戸、新しうなったんや」

「ガラスの張り替えだけで済むかと思うててんけどな、思うてたより大破しとった。ま、ガタも来てたんやろうな。申し訳ない気もしたけどお言葉に甘えて作り替えてもろた」

いつ支度をしたのかユウやんの目の前にジョッキと白い小鉢が魔法のように並べられる。先代の格子戸は九月に吉田のおばちゃん達の夫婦喧嘩のとぼちりを喰って大破した。おばちゃんが約束した通り、早々に大工が来て真新しい格子戸を仕立ててくれた。入口の辺りに立つと未だニスの匂いがぷんとする。「これ何？」

箸を割りながらユウやんは小鉢に盛られた平たい漬物を観察した。沢庵にしては随分色が濃く焦げ茶色である。鼻を近付けると独特の燻したような香りがした。

「いぶりがっこ、秋田の名産や。沢庵を燻製にして作るんやけど、元々は囲炉裏の上にぶら下げてひと冬かけて燻しとったらしい。日本酒だけやのうてビールやウイスキーにもよう合う面白い肴やで」

主人の解説を聞きながらユウやんはスモーク沢庵を一枚口に放り込んだ。甘い味の奥に煙たいような不思議な香りが立つ。

「なんやコマーシャルみたいやけど囲炉裏の味がするいうんかな」  
ユウやんは自分で言っただけで自分で笑った。

「いかにも冬がそこまで来てますいう感じやな」  
壁のホワイトボードにはこう書かれている。

お品書き

秋の終わり

「なんぞちよこつとした焼き物でももらおかな」

「椎茸でおもしろいもん作ったから、それ出させてもらおか」

ユウやんの注文に主人はそう答えて、支度に掛かった。

「なあ聞いてえな。先週めっちゃめでたいことがあってん」

ユウやんはむしようにその話がしたいらしい。主人の応えを待たずに喋りだした。

「震災のすぐ後くらいかな。神戸はわやになつてたし、わし、あの頃は大阪の京橋辺りですよ呑んでん。客の大半が常連いう焼鳥屋があつてな、そこで西本いうやつと仲良うなつてんけどな、わしの四つ下でコンピュータ会社でSEやつてるやつちゃ」

炭火の上で椎茸が焼ける香ばしい匂いがする。ユウやんはそちらに気を奪われながら又、いぶりがっこを齧った。

「これが人の話は聞かん。空気は読めん。押しの一歩みみたいな強引なやつでな」  
「またえらい人と付き合うとるな」

「いや、それがなんや憎めへんねん。ムードメーカーいうのかな。どこか間が抜けてて本質的には毒がないねん」

ビールが半ば空になる。

「ある日、その西本と呑んどつたらOLの二人組が入ってきてん。今年社会人になりましたみたいなの顔してて、如何にも場馴れしてへん雰囲気であらゆる浮いとつた。皆、素知らんふりしてるけど、店中の客がその娘らに注目してる空気が伝わってきた」

「そういうのあるなあ」

主人は仕上げにバーナーで軽く椎茸を炙って、皿に移しながら笑った。

「ふと、隣見たら西本がえらいそわそわしてるねん。分かり易いやつちやなて思うたで。で、『どつち?』て訊いたら『右』言いよる」

「ほんま分かり易いな。椎茸の野菜詰めや」

白い平皿に軸を切った椎茸が並んでいた。椎茸の傘を器にして微塵に切った野菜がこんもりと盛られている。上から振ったパン粉のキツネ色がいかに香ばしそうだ。

「野菜だけやったらまとまりがつかんから、ツナを足してマヨネーズで和えて

ある」

「なんやコンビニのおにぎりみたいやな」

笑いながらユウやんは椎茸を齧った。意外に複雑な味が口の中に広がって目を見張る。

「で？」

主人は目で続きを催促した。

「ん？ああ。焼鳥屋の料理って『ずり』とか『ぼんぼち』とか符丁が多いやろ。お品書き広げてまごまごしてたから、どないしたん？って声かけたってん」

ユウやんは椎茸がいたく気に入った様子でしみじみ噛みしめながら幸せそうな顔をする。

「その頃、西本は社会人三年目いうところからその娘らとたいして変わらへんかってんけど、こっちは十年オーバーのベテランや。場の雰囲気作ってたってしつかりその娘らと仲良うなっつてん」

「つて、ユウやんいくつから呑んでるねん」

「十六ん時から……。ええと、もう時効になっつとるよな？」

おそろおそろ訊く。四十過ぎの男を今更未成年者の飲酒で逮捕しに来る警察もあるまい。

「話したことなかったっけ？わしの最終学歴って中卒やで。高校中退いうやつ

「ちゃ」

ユウやんはジョッキを空にして焼酎の湯割りを頼んだ。

「わしの実家は芦屋の山手にあるえらい金持ちのお屋敷やねんけど、親と大喧嘩して高一の時に家飛び出して以来この生活や。時代も良かったわな。バブル経済まっしぐらで十代がふらふらしても何とでも食えた」

目の前に出された焼酎の香りをくんとかいでから、ユウやんは旨そうに呑んだ。

「その娘、弥生ちゃんていうんやけど。OLやのうて成り立てほやほやの婦警さんやった。ま、縁があつたんやろな。その夜がきっかけで西本と弥生ちゃんとは付き合い始めてん。二年くらい付き合ってからかな。めでたく結婚した。先週、結婚十周年のお祝いに呼ばれたとこやねん」

言ってユウやんはまた旨そうに焼酎を呑む。と、唐突に場違いなキューティ―ハニーのテーマが鳴り響いた。

「ほい。おう、どないした？……。ええっ、あれ今日やったかいな。……。うわっ、すまん」

ユウやんは電話を続けながら器用にジャンパーを羽織る。ポケットから丸めた札を出してカウンターに置くと身振りで釣りは今度と伝えて主人に片手拝みした。

「わかった。すぐ行くから待って」

素早く椎茸の残りを頬張ると焼酎で流し込んでユウやんは入口に向かった。主人に背を向けたまま軽く手を振り、滑りの良くなった格子戸を開けて傘を差し出す。

「うわっ、本降りになってきよった。十一月に降る雨は質たち悪いねん。雪に……」  
ユウやんの声は格子戸の向こうに消えて主人の耳には届かなかった。少し間が空いてから大きなくしゃみが聞こえた。

神戸という街の十一月はなんとも中途半端な季節である。秋というには底冷えがする。かと言って木枯らしが吹きわたるほど本格的に冬がやってきているわけでもない。自然、行き交う人々の服装もまちまちに入り交じっている。

しのぶがボアのコートで重装備をして酔鏡の格子戸をくぐったのはユウやんがその戸を飛び出して行ってから二週間ほど後の雨の夜のことである。

「こんばんは」

着膨れた毛皮の奥からくぐもった声が響く。いらっしやい——と主人が声を張ったがよく聞こえなかったらしく、しのぶは小首を傾げた。『あっ』と小さな声を立ててフードをはね上げる。被ったままだったことに気付いていなかったらしい。桜色のリボンに束ねられたポニーテールが肩の上で躍った。

「一番やで」

主人に言われてまた『あっ』と声を上げ、誰もいない店の中を見回した。

「ごぶさたやね」

年代物らしいコートを脱いで裾の雨滴を払いながら頷くと『いろいろやるこ  
とがあつて……』と、しのぶはきまり悪そうに答えた。それから、はにかんだ  
ような笑みを見せる。

「はい、一番ビールや」

しのぶがカウンターにつくのと同時にジョッキと小鉢が並ぶ。しのぶはそれ  
を脇にやつて、もう一度誰もいないことを確かめるかのように店内を見回した。

「あの」

思い切ったように口を開く。が、間合いを計ったように格子戸が開いたので、  
もの言いたげな顔のまましのぶは言葉を呑み込んだ。

「ほら、やつぱり一番を狙うのは無理がありましたよ」

ひよろりと細長い体軀を覗かせながらセンセが言った。手に提げた黒い傘か  
らしたたり落ちる雨滴が雨脚の強さを窺わせている。センセに続いてランプの  
精のような巨体がぬっと店に入ってきた。

「おかしい。この雨でもう客がいてるやなんて……。って、しのぶちゃんかい  
な」



バリキはしのぶと好対照にユニクロのスエットシャツにパンツと夏場のよ  
うな薄着だ。大きなバッグを後ろに置いてしのぶの隣に腰をおろしたが、その  
頬は微かに上気していて店に着くまでの運動量を窺わせた。

「しのぶさん、お久しぶりですね」

バリキの隣に陣取ったセンチがその頭越しにしのぶに声をかけた。センチの  
服装はバリキとしのぶの中間でジャケットの下にグレーのベストを合わせて  
いる。『いろいろ私用に取り紛れていて……』——しのぶがもごもご言っている  
間にバリキとセンチの前にもジョッキと小鉢が並んだ。

「ほな、お久しぶりです」

言ってバリキがジョッキを掲げ、両隣から差し出されたジョッキとぶつかっ  
て賑やかな音を立てた。

「あたし、お酒呑むの久しぶりなんです」

ジョッキを三分の一ほど一息に飲むと、しのぶのテンションがチェンジした。

「吉田の旦那が立て籠もった時以来ちやう？元氣しとった？」

「はい、おかげさまで。ちよつといろいろあつて疲れてますけど、若いですか  
ら」

言っつてしのぶはけらけらと笑う。

「そうそう、あたし今ウォーキングにハマってるんです。やっぱり健康第一で

すもん」

「へえ、えらいやん。いつからやってるん？」

「今朝から」

それはハマっているうちに入らない。

「まあ、これから寒くなりますから風邪をひかないように気を付けて下さい」

「任せて下さい。セーター二枚の上からコート着込んで重装備してますから」

「それって、ウォーキングというよりは、限りなく散歩に近いと思うで」

「えー、そうですか」

バリキのツツコミにしのは不満そうに口をとがらせながら箸を割った。

「これ、牡蠣ですか」

しのはぶは付け出しの小鉢を覗き込みながら訊いた。佃煮色に染まった牡蠣の粒にとろみをつけた煮汁がかかって艶やかに光っていた。目にまぶしいような白髪葱がアクセントになっている。

「ああ、しぐれ煮にしてみてん。今日のテーマの出発点は江戸からという趣向や」

主人の背後のホワイトボードにはこう書かれていた。

お品書き

アジアンテイスト 屋台風

「これはどういう仕掛けなんでしょう。私が知っているしぐれ煮は味を染み込ませるために身がもつと縮んでいます。この牡蠣は身縮みしていないのに味はしっかり染みている」

「企業秘密や」

主人はちよつと意地悪くにと笑った。

「うわっ、いけずや。センセ一緒に考えましょ。その前に……。牡蠣でもう一品お願いしたいんですけど。その屋台風って何です？」

しのぶはホワイトボードを指しながら訊く。

「アジアン料理の中でも道端の屋台で売ってそうなもんを揃えましたいうことっちゃ。いかにも居酒屋っぽいやろ。牡蠣やったら台湾の牡蠣のオムレツを出さしてもらおかな」

相変わらず主人のレパトリーは広い。

「俺、めっちゃ腹減ってるねんけど」

バリキがもはや定番になっているセリフを口にする。

「ベトナム風のちよつと変わった炒飯を大盛りでどない？」

「なんでもええ。出したって」

身も蓋もない返事が返ってくる。

「私も夕飯の代わりになるものが欲しいところですよ。あと何かお酒で変わったのがあればそれを」

「初あげが出てますよ。呑み口はちよつとお澄まししたような愛想のない味やねんけど、その分料理の邪魔にならんで何にでも合います。それに意外と後味をひきますねん。これと、ベトナムの生春巻きを出しましよか。ライスペーパーは結構、腹持ちが良えから夕飯の代わりになりますわ」

言いながら主人は手を休めず支度を続ける。

「あ、そや。あたしました怪奇現象に遭遇したんです」

「またかいな。なんや、毎度聞くだけ時間の無駄な気がするんは俺だけか？」

「いやいや、肴にはなってますよ」

バリキとセンセの揶揄にもめげず、しのぶが高らかに宣言する。

「題して『歩くカーネル・サンダース』」

「あ、俺、オチまで分かってしもた」

バリキの横でセンセも頷いている。バリキは空のジョッキを振ってお代わりを頼んだ。センセの前に黒い平皿が出てきた。半透明のライスペーパーに包まれた生春巻きが並んでいる。緑の葉野菜に剥き海老が透けて見えているのが楽しい。濃い火色のチリソースからぷんと酢が香る。その脇に本錫ほんすずのぐい呑みが

並べられ新発売の酒がなみなみと注がれた。

「いや、ほんまに不思議な話なんです。この前、好美先輩が目を覚まさはつたら枕元にカーネル・サンダースが立ってたんですよ」

まるで本人が立っていたようにしのぶは語るが、要は店の人形が立っていたと言いたいのだろう。

「もしかしてその前の晩、好美先輩はお酒飲んだんちゃう？」

「え？なんでわかるんですか？その日は職場の女子会であたしも一緒に呑んでたんです。あたしは普通に呑んでたんですけど、先輩、あたしに対抗意識を燃やしたみたいで同じペースで日本酒呑んでいました」

「しのぶちゃんと同じペースで呑んだら男でも潰れると思うで」

「ええっ、ここの常連の方はみんな普通にしていますやん」

「いえいえ、ここの常連は世間では普通じゃないんですよ。たぶん」

しれっと言ってセンセはぐい呑みに口をつける。しばらく舌の上で転がしてから喉に流し込み黙って生春巻きに箸を伸ばす。どうやら酒がお気に召したようだ。

「で、一次会の後、どこかで飲み直すぞーって、夜の三宮に消えて行か合ったんです」

しのぶが話を戻す。

「その先輩、けっこう大柄で力も強いんじゃない？」

「そら、学生時代はずっとバスケットやってはったそうですから。……ってなんでわかるんですか？」

「ま、俺の卓越した推理能力というやつかな」

「推理のすの字もなくてもわかりますよ」

センセが珍しくツツコミ役に回る。

「で、好美先輩はその人形をどうしたん？」

「はい。その人形がどうやって歩いたかは分かりませんが、どこにあったかは想像つきますやん。先輩がこっそり近所のケンタツキーを偵察に行ったら案の定、人形がなかったそうなんです」

『案の定やないで』とバリキが笑った。

「で、とりあえず人形を近所のバス停まで運んで、公衆電話からケンタツキーに電話したんやそうです。好美先輩、ああ見えて物真似とか得意なんですよ。それで低い声作って、『わしや、カーネルや』言うたら店員さんえらいびっくりしたみたいで……」

きつと、一生忘れられない電話になっただろう。

「『道に迷うたみたいやねん。三丁目のバス停におるから迎えに来てくれへんか』って言うたそうです」

関西弁のカーネル・サンダースはなかなかシユールである。

「で、物陰に潜んで見張ってたら青い顔した店員さんが二人飛んできてカーネル・サンダースを連れて帰ったそうです」

話の途中からバリキはカウンターを叩いて笑った。

「た、確かに怪奇現象や。店の人はめっちゃ怖い思いしたわな」

と、不意に柔道一直線のテーマが店内に鳴り響いた。バリキは素早く携帯を引っ張りだして耳に当てた。

「おう。。。。えっ、なんやて？ち、ちよっと待ってや」

バリキは目でカウンターのの上を探してから、しのぶに『書くもん持ってない？』と囁いた。しのぶがバックからペンケースを引っ張りだして開く。バリキは鉛筆を一本摘んで握り直すと箸袋の裏に何やらメモを取り始めた。

「。。。了解。又、連絡するわ」  
言って電話を切る。

「ありがとう。助かったわ」

鉛筆をしのぶに返そうとしてバリキは改めてそのオーソドックスな六角形の鉛筆を見遣った。

「小学校の頃の使いさしが沢山あるんです。勿体ないから愛用してます」  
バリキの視線に気付いてしのぶが説明する。『おっ』と声を上げてバリキが

鉛筆をひっくり返した。尻の一面がナイフで削られて名前が書かれている。

「ゆうき……しのぶ。へえ、しのぶちゃんの名前で、ゆうきなんや。初めて知った。どんな字書くん？」

しのぶはなぜか慌てたようにバリキの手から鉛筆を奪い取るとペンケースに戻した。

「ゆうき。……ん？ゆうき？」

呪文のように繰り返すセンセの声が心なしか硬くなった。

「ゆうきって、もしや結城紬ゆづきの結城ですか？」

尋ねる声がうわずっている。しのぶに続いてセンセまでが豹変したのに戸惑い、バリキが主人に助けを求めるように顔を上げると、なぜか主人は眉間に深い皺を寄せて難しい顔をしていた。

時ならぬ緊張した空気は格子戸を引く音に破られた。主人が商売人の顔に戻る。

「いらっしやい」

主人は声を張ったが返事が——ない。

先客達は振り返って格子戸を見遣った——ユウやんがなんだか疲れた顔をして立っていた。

「おう」



三人に気付いてユウやんは気のない声を上げた。それから『湯割りとなんか軽いもんを。：：あ、揚げ物もんはなしな』と上の空の口調で主人に注文した。

「なんか、あつたんか？」

三人から離れてカウンターの隅に寄り掛かるように腰をおろしたユウやんに、バリキがおそろのおそろ代表質問した。

「知り合いがな：：。亡くなってるん」

出された小鉢を引き寄せて箸を割りながらユウやんはぼそぼそと言った。

「この前話した西本いうやつやねんけどな」

主人をちらりと見遣って言うと、魔法のような手際で出された湯割りのグラスを舐めた。

「ビルの屋上から落ちたそうや。：：警察では、自殺と見てるらしい」

店の中にまで雨が降ってきたような、うそ寒い居心地の悪さをバリキは背中を感じた。

ユウやんは湯割りを舐めながら西本との出会いと近況を話した。

「弥生ちゃんと結婚したのが十年前。翔君いう三歳になる男の子がいてる。その子が生まれた年にマンション買って、まあローンはあるけど普通の生活や。自殺するとは思えへんねんけどな」

ユウやんは疲れたような溜息を吐いて主人に空のグラスを差し出した。

「遺書とか、遺ってなかったんか？」

バリキの言葉に首を横に振る。

「夜中に会社の屋上から飛び下りてんけど衝動的なもんやったみたいや。動機ちやうかって言われてるのは、最近あった異動の話や。西本はSEいうてコンピュータのエンジニアやねんけど、営業に異動せいう辞令が出とったらしい。だいたいエンジニアいうのんは職人<sup>かたぎ</sup>で自分の実力を認めてもらいたがる人種や。それが、明日からその職人やめて営業に行け言われたわけや。よっぽど屈辱やったんかな。元々躁鬱の激しい奴やったし、思い詰めたら衝動的にやっつてしまいうような気もするねんけどな」

言いながら口調が納得していかないのが伝わってきた。

「しかし、技術屋が営業の部署に行くってのはよくある話なんですかね。会社のことはよくわかりませんが、まるで畑違いの人事のような気がする」

「会社からしたら空気の入れ換えのつもりやったらしい。あの業界は技術の動向が激しいやろ。営業マンではツッコんだ会話についていくのが厳しいらしい。かというて、商談の度にSE連れていくんでは経費がかかってしやあない。ほな、いつそSE経験者を営業マンにしてしまおう言う発想やな。そういう目的やから、SEやったら誰でも良えいうわけにはいかん。ベテランで腕が立つ必要があるから、白羽の矢が立ったんはむしろ胸張って良え話やねん。それに、

西本はしゃべりも巧いし、わしに言わせたらうってつけの的を射た人事に見えますわ」

「めっちゃ素朴な疑問ですけど、なんでそんなに事情に詳しいんです？」

しのぶが空になったジョッキを差し出し、熱燗を注文しながら尋ねた。

「そら、西本繋がりでその会社に友達がいるもん。そいつらにいろいろ事情を教えてもろてん」

「お待ちとおさん」

料理が客たちの前に並べられていく。

「台湾の屋台ではメジャー商品らしいで。牡蠣のオムレツや」

しのぶの前の丸皿には鮮やかな赤のチリソースがかかったオムレツが載っている。牡蠣は卵に隠れているらしく見えないが三つ葉の緑がアクセントになって彩りが楽しい。

「これはなんですのん？」

卵の下の半透明のゼリーのようなものを箸で突つきながらしのぶが訊く。端のかりかりに焼けている部分が特に旨そうだ。

「水溶き片栗で作った生地やな。本場もんはさつまいもの粉で作るらしい。要は屋台の料理やから単価を抑えんとあかんやろ。嵩増やしにしか思えへんねんけど、リアルに拘って付けてみてん」

早速しのぶは箸で切って口に入れてみる。

「あ、卵がすごい。牡蠣の風味が濃厚で、あたしこんな味初めてかも……」

歓声を上げるしのぶの隣のバリキには大皿に大盛りというよりは特盛に見える炒飯が出て来た。上にハーブらしい緑の葉と糸唐辛子が盛られていて薄茶色のタレが添えられている。

「そのタレをかけてよう混ぜて食べて」

主人に言われた通りにして蓮華で混ぜながらバリキは炒飯を口に入れた。

「確かに変わってるな。炒飯いうたらパラツとしているのが身上やと思うねんけどわざわざタレをかけてべしやっとするというのにちよっと違和感がある。だいたいこのタレ、俺の好みからしたら甘過ぎや」

珍しく料理が不評である。が、数秒後。

「か、からいからい」

主人がニヤニヤ笑いながら水を差し出した。

「飲むんは自由やけど、飲んだらもつと辛くなるで」

主人は意地の悪いことを言う。

「前言撤回。これ良えわ。この甘さが辛さをぐんと引き立てよる。これクセになるわ」

バリキは出された水は脇に追いやって猛然と皿に蓮華を突っ込んだ。

「ユウヤンにはサプライズな料理出したろ。さて餃子の中身は何でしょう？ポ  
ン酢で食べてみて」

四角い平皿に小振りの餃子が並んでいる。ユウヤンは小首を傾げながら一つ  
ポン酢に浸けて口に放り込んだ。

「はるほとはひや」

裏返った声でもごもご言うので、他の客達から日本語を喋れとブーイングが  
出た。

「まるごと牡蠣や。餃子一粒に牡蠣一粒使うてる。生姜と葱が良え仕事してる  
で」

「先に生姜と葱と一緒に牡蠣をさっと炒めてから皮に包んで焼いてるねん。せ  
やから、えぐ味が少なくてさっぱりしてるやろ」

ユウヤンは頷きながらグラスを煽る。

「あの、さっきの話やねんけど」

バリキが口を開いた。

「遺書はなかったんやろ？何で自殺と断定されたんやろ。事件の可能性もある  
んちゃうん？」

「ああ、それな。その屋上は密室やってん」

「鍵がかかってたいうことか？やったら、その西本さんはどうやって入ってん」

ちよっと待ってと手で制して口の中の物を落ち着かせてからユウやんは口を開いた。

「事件があったんは、わしがこの前この店に顔を出した日やから二週間くらい前や。えらい雨が降った日やな。死亡推定時刻は夜の八時から十時くらい。死体は人通りの少ない路地にあったから次の日の朝、九時過ぎまで発見されへんかった。で、問題の屋上やねんけど、夜の七時から朝の七時までは鍵がかかっているねん。今のところ西本が鍵の開いてるうちに屋上に入って、死亡推定時刻に飛び下りたというんが有力な線や。これが殺人事件やとしたら、死亡推定時刻の時間帯はもう鍵がかかっているから西本を突き落とした後、犯人は屋上から出られへん」

「その屋上から飛び下りたのは間違いないのですか？」  
「センセが生春巻きを口に持って行きながら訊いた。」

「ああ、西本の靴が屋上の端に揃えて脱いであるのが後で見つかったんですわ」  
「屋上の鍵がかかっている時間がめっちゃ中途半端なのが気になるんですけど。普通、かけっぱなしにするもんちやいます？」

と、しのぶ。

「それなあ。西本の会社でも去年、喫煙スペースをなくしよったらしいねんけど、それ以来屋上が隠れ喫煙スペースになってたらしいねん。で、守衛さんに

かけあつて昼間だけ開けさせとつてんけど、今大問題になつてゐるわ」

「保安もへつたくれもないな」

「ほんまに。それが又、かけあつたんが偉いさんやったらしいから示しがつかへんねん」

店に入つて初めてユウやんは薄く笑つた。

※

雨は降り続けている――

電話が鳴つている。翔を寝かしつけて一緒にうとうととしていた弥生は飛び起きた。せつかく寝てくれたのに――大急ぎで子機に飛び付く。

「もしもし。……。あ、お姉ちゃん」

弥生はまだ焦点の合わない目を擦りながら言った。

「みなさん元気？……。うん。相変わらずよ。どうしたん？……。え？今晚？普通に家にいてるけど。……。ええっ、お父さん預かってくれて。そんなん急に言われても……」

弥生は翔が眠る奥の部屋を見返りながら言った。康男はまだ帰っていない。窓の外を見遣ると雨は本降りになってきたようだ。

「え？拓くんが……。うーん。それやったらしやあないね……。うん、わかつた。着いたらインターフォン鳴らして。エレベーターのどこまで迎えに行く

から」

電話を切ると、我知らず『あーあ』と愚痴のような溜息を弥生は漏らしていた。

※

「で、その口振りやったらユウやんは自殺説に納得いってないんやろ」

「まあな。衝動的に言われたらそれまでやけどどうもしっくり来ん。密室の件がなかったら殺人の可能性も充分あると思うてる」

「けど、殺人やったら犯人がいてるわけやん。容疑者いうか怪しいやつはいるん？」

炒飯をさらえながらバリキは言った。あれだけあった料理はあらかた片付いて、『さっぱりしたもんを』と次の皿を注文している。

「実は、ビルのセキュリティの関係で容疑者はある程度絞れるねん。ビルのお入りは朝の七時から夜の七時まででは正面玄関が開いとって、まあ出入り自由や。社員以外に付き合いのある業者の人間も出入りする。出入りの激しい時間帯やったら無関係な人間が出入りしてもわからへん。問題は夜や。午後七時に正面玄関が閉まってそれ以降は通用口からしか出入りできん。ここは入るんも出るんも社員の持つてるICカードがないと戸が開かん。更に、ICカードを使うた記録はコンピュータに残るといいう仕掛けや。犯人がもし社員以外やった場合、



それでも正規の入館証を発行してもらったければ七時以降にビルから出ること  
は可能や。けどこれから人殺すのにその日自分がそこに居てましたという記録は  
残したくないやん。わしやったら、七時までに正面からこっそり入って屋上で  
待ち伏せする作戦を選ぶ。けど、これやと犯行後、次の朝に正面玄関が開くま  
でビルに潜んどかんとあかんわけや。これは犯罪心理学的に考えてあり得へん  
やろ。結果的に死体の発見は朝やったけど、夜中に発見される可能性もちろ  
んある。そしたら近辺のビルは軒並み警察の捜査が入る。そしたら袋の鼠や。  
そないな危ない計画立てへんよな。そやから容疑者は、死亡推定時刻の午後八  
時から十時に近い時間帯にビルを出た社員の中におる」

ユウやんは言い切ると、焼酎を煽るように呑んで豪快にむせた。

「センセ、どう思われますか？」

バリキがおそろおそろ訊く。

「春に紹介した病院では脳波までは取らなかつたはずで。早急に検査の手配  
をすべきでしょう」

「やっぱり……」

「ちよ、ちよっと、何の相談をしとるねん」

「ああっ」

しのぶが頓狂な声を上げる。

「もしかして、ユウヤんって双子……」

「だから、何の話や」

「いえいえ、ユウヤんの説明があまりにも整然としてはったから、病気説と別人説が浮上してまして……」

「やかまし。間違いなく本人やし至って健康や」

「じゃあ、いつものぐだぐだは？」

「あのなあ。今日はお仕事モードや。放つといったら夜が明けそうやから話を進めるで。そうやって容疑者を絞ると怪しいのが三人いてる。ただ、状況からすると西本を恨んどったというより西本に恨まれてもおかしくないと思えるやつばかりやねんけどな」

「なんやそれ」

「ま、聞いてや。三人とも西本と同じ部署の人間で通称桃太郎トリオと呼ばれてるらしい」

「なんや楽しそうなトリオですやん」

「全然楽しうないねんな、これが。まず、西本の上司の内村うちむらかずよし一義。万年課長で、能力的には担当者と変わらへんらしい。業績は西本に頼りつきり、トラブルが起きたら西本に丸投げして『僕、何もできません』って顔で逃げ回るらしい。で、営業に誰か異動させなあかんで話が来た時も考えなしに西本を推したらし

い」

ユウやんは牡蠣餃子を一口に放り込む。

「おるなあ、そういうタイプ。下手したら異動した後も、『西本さん、助けてえ』って営業に駆け込んだりして」

「いや、ほんまにやりかねんらしいで。ともかく、そいつがやや猿顔やねんて」

「やや猿顔って……、どんな顔やねん？」

「まあ、とりあえず次な。交野秀夫、西本の同期や。こいつがやや犬顔」

「だから、どういう顔やねん」

「自分の仕事の枠を勝手に決めてしもて、それ以外は一切仕事をせんタイプ。西本の異動で西本の持ち分を担当せえて言われた時も、それは自分の仕事やないて言い切ったらしいから筋金入りや。人がやることはやたら批評するんやけどな、自分でやってみいて言われたらへらへら逃げ回るから、陰で評論家って言われてるらしい。技術屋はそういう口だけのやつを一番嫌うからちよつと浮いた存在みたいやな」

「そいつ、定時になつたらいつの間やらおらんようになってるんちゃう？ 想像つくわ」

「で、最後に山内沙恵」

「やや雉顔か？」

「いや、やや雉似らしい」

コメントのしようがなかったらしく、バリキは曖昧に笑った。

「一見そつなく仕事をこなすように見えるけど、経験のないことや、やりとらないことが回ってきたらヒステリーを起こして全力で拒否するらしい。西本の異動にも最後まで反対してたらしいんやけど、これは自分が内村の面倒見させられるんちゃうかと考えてのことらしい」

「内村って誰やったっけ？」

「猿顔」

「あ、万年課長か」

分かり易い。

「で、総括するとその三人の動機は何なんですか？」

センセが空になった皿を戻しながら訊く。何か軽めのものを——と注文した。

「動機は特にない」

ユウヤんが言い切る。

「でも、それでは容疑者とは言い難い」

「普通に考えたらその通りや。けど、西本の死因は転落死なんですわ。毒を盛られたり拳銃で撃たれたんと違って、これが殺人やとしたら犯人と容疑者は格闘いうか揉み合い必至になる。返り討ちに遭ってしまいう可能性は充分あります。

西本が恨み言の一つも言いとうなるとしたらこの三人や。揉み合ううちに誤つてという可能性はあるわけです」

「なるほど」

「ちなみに、その三人は事件の夜は残業してはったんですか？」  
しのぶもオムレツを空にして皿を返しながら訊いた。おまかせで何か辛いものを——と注文する。

「納期が近いとかで全員十時前後にビルを出たらしい。ちなみに、死亡推定時刻の八時以降、ビルを出た人間は三十一人。その中で西本と面識があった人はその三人だけや。ビルに入ってきた人は十一人やけどこっちはよその部署の人間で面識がない。……あ、わしがなんでそんな情報まで掴んでるかは訊かんというてな。答えられへんから」

言って最後の餃子を口に入れる。見慣れたへらへらした笑いになんだか凄味が感じられる。今宵のユウヤんは一味違う気がした。

「あの、今さらやねんけど」  
バリキが口を開いた。

「この状況って俺らに事件の推理をしてくれて、期待してる？」  
「そやで」

ユウヤんはあっさり頷く。

「いろいろ考えてみたけど事件のポイントは密室の謎や。それが解ければ少なくとも桃太郎トリオの誰にでも犯行可能や。一人で考えても埒があかんと思うてな。ここへ来てん」

「いくつか教えてほしいねんけど」

「はいどうぞ。あ、ちよつと待って。大将わしなんぞ甘いもんちようだい」

餃子の皿を戻しながらユウヤんは言った。

「出た。毎度毎度よう胸焼けせんこつちや。ええか？質問するで。そのビルは何階建て？」

「十階建てや」

「屋上の鍵ってどんな構造のやつ？合鍵が作れるかどうか、中からは鍵がないと開かんけど屋上側はポツチになっただけで開け閉め自由とか」

「普通に鍵穴に差す鍵やな。どつち側からも鍵がなかったら開け閉めできへん構造や。鍵自体はありきたりなもんやから街の鍵屋でスペアも作れると思うけど、犯人がスペアを用意しとったいうのは疑わしい。それって、計画的に屋上に呼び寄せて殺したということやろ。誰が犯人やとしてもこの事件つてもっと突発的な事故に近い気がわしはするねんな」

「あと、屋上のフェンスがめっちゃ気になる。普通そないに簡単に転落するよいうな造りになってへんのんちやう？もし、よじ登らんと落ちへんような頑丈な

造りやったら突発的な事故説はなしや」

「フェンスなんてあらへんで。屋上の縁に七十センチくらいのコンクリートの囲いがあるだけや」

「げっ、それって無防備過ぎるやろ」

「そやかて、隠れ喫煙スペースになるまでは鍵かけっぱなしやったし、基本的に工事業者しか立ち入らん場所やもん。街ん中見渡してみ。なんもない屋上の方がよっぽど多いで」

「なんや工場勤めの俺には想像できへん不用心さやねんけどな。まあ、それやったら揉み合って誤って転落いうのんも領ける」

「いか普通そんなとこで揉み合わへんけどな」

「私からも一つ聞いて良いですか」

センセがご丁寧に挙手してから口を開いた。

「なんですやろ」

「事件当日の西本さんの足取りが気になるのです。仕事を終えてから、その：転落するまでどこで何をしていたかはわかっていないのでしょうか？」

「最後に見掛けられたんは、六時半頃に『失礼します』いうて事務所を出たとこらしい。西本は十二月に異動になる身やからな。ここんところは引き継ぎと身の回りの整理が主な仕事や。桃太郎トリオが抱えてるプロジェクトも当然関

わってないし、定時早々に引き上げとった。自殺説の動機付けとしてはそういう生活が閑職に追いやられたちゆう気分にしたんちゃうかという考えもあるらしい。残業して当たり前前の業界やからな。桃太郎トリオは自分らはこないに残業しとるのに定時で帰りよってて、筋違いな愚痴をこぼしとったらしいけどな」

ユウやんは湯割りを呑み干して又薄く笑った。

「それが西本の最後の目撃情報や。通用口の出入りには記録されてないからそのままビルの中に残ったか、ビルから出たとしても七時までにビルに戻ったと考えられる。で、七時までに屋上に上がったんやろうというのが一番有力な説や」

「はい」

律儀にしのおも手を挙げる。『はい、しのおぶさん』いつも通りセンスが指名する。

「二つ気になってることがあります。一つは西本さんの生命保険ってどうなるんでしよう。自殺やったらおりへんとかやったら関係者の利害関係が変わってくると思うんですわ」

「お、鋭いところ突いてくるやん。わしも気になったから弥生ちゃんに確かめてん。今の保険に入ったのは翔君が生まれた時やから、もう三年経ってる。自殺



でもおりるそうや」

「あちゃ、保険会社の陰謀説はなしか」

「そんなん考えとったんかい」

「二つ目は考えられる自殺の動機って異動のことだけなんでしょうか？ プライベートとかで悩んではったことはないんでしょうか？」

「そういうのは本人でないとわからんもんやろうけどな。強いて言うたら弥生ちゃんのお父さんが認知症を患うとってそれなりに負担やったみたいや。弥生ちゃんはお姉さんと二人姉妹で、交代で世話してるらしい。けどなあ、それかて主に世話してるんは弥生ちゃんなわけで、西本がそれを苦にしてっていうんは持って回った動機やわな」

ユウやんの目の前に小振りのガラスボウルが置かれた。

「ええっ、これってマンゴープリンか。さすが大将や。明日にでも香港に酔鏡二号店、オープンできるで」

適当なことを言いながらスプーンを取ると山吹色のゼリーを掬い取る。意外に奥行きのある複雑な味に歓声があがる。

「わりと単調な味になり易いデザートやからな。生クリームからスキムミルクまで乳脂肪分の違う数種類の乳製品を使うて奥行きを出してるねん。ま、その比率に秘密があるわけや。ええと、バリキにはさっぱりしたヘルシーなシュー

マイヤ」

緑色のシュウマイが出てきた。

「お、これチャンダムに出て来たやつちゃう？白菜のシュウマイ。シュウマイの皮の代わりに白菜使うやつ」

「よう知ってるな。観てたん？」

「弟がな。俺はたまたまその回を観ただけや。けど、これ食べてみたかってん」  
バリキは嬉しそうに箸を伸ばす。

「おっちゃんって本格的なデザートも作れるんや。奥が深い言うかどこで修行したん？」

シュウマイをポン酢に浸けながらバリキが訊いた。

「ま、見よう見真似いうやつやな」

不敵な笑いを浮かべて主人はしれっと言う。

「センセには屋台料理っぽくないけど、今日のお薦めや。キムチと鮭のルイベの薄造りを出さしてもらお」

透明な平皿に薄造りにした鮭のルイベが扇型に盛り付けられている。扇でいえば要<sup>かなめ</sup>に当たる部分に細切りにしたキムチがこんもりと盛られていた。トラウトサーモンの薄い紅からキムチの真紅にかけて織りなすグラデーションが美しい。微かに胡麻油が香った。

「ルイベでキムチを巻いて食べてみて下さい」

主人が説明する。

「これは……。紹興酒を下さい」

ほとんど叫ぶようにセンチは注文した。主人は頷きながら、しのぶの前に小鉢を出した。

「ポツサムキムチ。別名、『王様のキムチ』と言われるキムチの最高級品や。いつも行ってる市場でセールで出とってめっちゃ安かってん」

「へえ、何が入ってるんやろ……。ええっ？なにこれ、牡蠣ちやいます？牡蠣がまるごと入ってますやん」

「今日は牡蠣尽くしにしたろ思うてな。他にも帆立ての貝柱、烏賊、海老、松の実、梨、栗、ナツメなど山海の珍味がこれでもかて入ってますやて」

主人はパッケージの解説を読み上げながら、センチの紹興酒とバリキの焼酎の支度にかかる。

「俺、思うねんけどな。密室なんて最初からなかったんちやうやろか？」  
バリキがいきなり本題に戻った。

「どういうことや？」

「屋上が密室やと考えられてるのは七時に守衛さんが鍵をかけて、その後、鍵が守衛室にずっとあつて誰も手を出せんかったからやろ？」

「ああ」

「それは、守衛さんが事件に関わっていないという思い込みがあるからちゃう？」

誰かが、あつと言った。

「守衛さんが桃太郎トリオの誰かと共犯か、もつと言うたらトリオはそもそも事件に関係のうて、守衛さんが主犯やったら密室なんて最初からないわな。それに通用口の出入りの記録をいくら調べても意味のないこっちゃ。犯人は犯行後もずっとビルの中、守衛室におったんやもん」

「うわあ、なんや今日のバリキさんは一味ちやいますねえ」

しのぶが感嘆の声を上げる。

「動機はなんやろ？」

「そこまではわからん。ただ、守衛さんは体育会系出身の人間が多いと言うことは言える。」

たとえば——あくまでも、たとえばやけど、七時に屋上の鍵をかけようと守衛さんが屋上に上がって行った。念のために屋上を一回り見回ったら、西本さんがなんぞ怪しい振る舞いをしとったとしたらどうやろ。押し問答の末に、揉み合いになったら、はずみで力が入り過ぎてっていうのはありそうな話や」

「あの……、センチ」

しのぶがおそるおそる声をかける。

「わかっていきます。バリキの検査も一緒に……」

「やかまし。大きな声で密談やめい。これが俺の地やて」

紹興酒と焼酎を二人の前に置きながら主人が口を開いた。

「バリキの意見に似てるねんけど、俺はもうちよっとシンプルに考えてみた。ユウヤんの考えでは、その晩西本さんと誰かが口論の末、誤って西本さんが転落した。けど、西本さんを恨んでる人は誰もいてなかったから、その誰かが計画的にことを進めてた可能性は低いし、予めスペアキーを用意してる可能性も低い。せやから屋上を開け閉めする手段はなくて現場は密室やったと言うことやろ」

「その通りや」

「逆に考えたらどないやろ。西本さんを恨んでる人はいてへんかった。けど、西本さんはトリオの誰かを恨んでもおかしくない。だったら、スペアキーを用意したんも、その誰かを呼び出したんも、ことによつたらその誰かを突き落としたりとまで考えとったかもしれへんのは西本さんの方ちゃうやろか」

客達の箸が止まった。誰も何も言わない。

「結果だけ見たら正反对やけど、ホンマは別の誰かが転落して、西本さんは屋上の鍵をかけて逃走する筋書きやったんちゃうやろか。ところが、その誰かは

西本さんを突き落としてしまった。そこで、西本さんの置き土産のスペアキーを使って逃走したと考えれば辻褄が合う」

しのぶの手から割り箸がこぼれ落ちた。

「センセ……」

「わかってます、しのぶさん。検査は三人分必要です」

センセはきっかりと頷くと、すっくと立ち上がった。それを見たしのぶは、わけもなく『ひっ』と喉の奥で息を詰まらせた。

「私はお二人とは少々違う意見です」

手を後ろに組むとセンセはいきなり歩き始める。

「トリオの中のある人物は明確に西本さんに殺意を抱いていた。揉み合った末に転落させるなどという偶然に任せるリスクを背負う気はさらさらなかった。もっと巧妙な方法で、しかも自分は一切現場に立ち入らず西本さんを殺害したのです」

何か意味があるのかセンセは壁のホワイトボードの方をビシッと指差した。

「ずばり犯人は雉山の山内沙恵。二人は不倫関係にあったが最近別れ話がこじれて揉めていたのです」

まるで見てきたようにセンセは解説する。

「まず彼女は浮気現場を隠し撮りして脅迫材料にします。次に二人の顔がはっ

きり分かる写真を選んで大きく引き伸ばし竹竿の先にぶら下げて向かいのビルからこちらのビルに伸ばします。これで準備完了。七時少し前に西本さんの携帯に電話を掛けてすぐに屋上に来るように呼び出します。西本さんは既にビルの外に出ていたが慌てて引き返すと屋上に上がっていく。事情が事情ですから、人に見られないよう非常階段などを使って密かに屋上に向かったことでしょう。屋上の戸を開けると日はとつぷりと暮れてビルの十階は嵐のような強風。そして雨。それでも、夜のネオンの中にひらひらと揺れている何かを西本さんはすぐに見付けます。慌てて駆け寄ると不倫現場が大写しになっている写真が頭上で揺れている。なんとか竿からもぎ取ろうと必死で手を伸ばしますが写真には届きそうで届かない。このまま放置するという考えが一瞬頭をよぎりますが、翌日喫煙に來た誰かに見られたら自分は一貫の終わりであることに気付いて愕然となる」

興が乗ってききたらしいセンセは紹興酒を一気飲みして続きを語った。  
「一旦戻って何か道具を取ってこようと扉に飛び付いた西本さんに更なる追い打ちが待ち受けています。鍵が開かない。守衛さんが施錠してしまったことに気付きますが時既に遅し。吹き降る雨と風の中、さながら嵐の中のリア王のごとく半狂乱になる西本さん。激しい雨と風にすっかり体は冷やされ、その時点で西本さんは冷静な判断を奪われてしまっていたのです。『もう少し体を伸

ばせば届くんじやないか？』なんの根拠もないそんな思いに背中を押されて、一刻も早く雨風がしのげる場所へ戻りたかった西本さんはしてはならない体勢で写真に手を伸ばしてしまふのです。雨に濡れたコンクリートはことのほか滑りやすいものです。勢い余って西本さんは転落。山内沙恵がしかけた巧妙な心理トリックはまんまと功を奏したのです。当の山内沙恵はこの間もオフイスにいてアライバイを確保。会社を退けた後、向かいのビルの屋上に上がり、写真を回収すれば証拠は何も残りません」

センセは気を持たせるように言葉を切った。

「こうして、彼女は密室に一步も足を踏み入れることなく彼を殺害するという離れ業をやったのけたのです」

「な、なんやセンセまでいつもとちやいますやん」

しのぶは怯えたように立ち上がると戸口ににじり寄った。

「まだ気付かないのかね、しのぶ君」

いきなりセンセが死神博士の嗶れ声を出す。

「ここに居る者達はみな、我がシヨツカーが既に改造人間の手術を施しているのだよ」

「いやあ」

しのぶが金切り声を上げる。



「センセ、なあてセンセ」

もてあまし気味にユウやんが言った。

「やかましてかなわんし、しのぶちゃんイジるんはやめて」

センセは素直に『はいはい』と素の声に戻って席についた。

「ええ、続きまして……」

しのぶもちやつかり素に戻って席につく。

「あたしもセンセと同じで犯人は計画的に西本さんを殺害したんやないかと思うてます。で、その後密室から脱出せんとあかんのですけど、それは守衛さんが共犯やったとか、西本さんがスペアキーを持ってたと言った邪道ではなくいきなり、主人とバリキの説を邪道で切り捨てる。」

「もつとスタイリッシュな方法やったんちゃうかと思うんです」

猪口を煽って徳利から爛酒を注ぎ直して、しのぶは話を続ける。

「そもそもこの屋上が密室やと思われてるのはビルの中と外を繋ぐ唯一の扉に鍵がかかってるからです。でも実際にはその扉以外は密室どころか壁も天井も遮るものがない広い広い空間が広がってたわけですよ」

いつ駄洒落が飛び出すかと固唾を呑んで見守っていた男達はいつもと様子が違うので、些か拍子抜けした。

「格闘の末、西本さんを突き落とした犯人は物陰に隠しておいた気球に飛び乗

り……」

男達が総コケする。

「つて、そう来るんかい。準備良過ぎやろ」

ユウやんがかろうじて立ち直りツツコミを入れる。

「明智君、また会おうってスタイリッシュに去って行くんです」

「ふっるう。どこがスタイリッシュやねん」

「ええっ、やつぱり古いですか？じゃ、じゃあ。胸元のスイッチを押したらバツてハンダグライダーが広がって……」

しのぶは豪快に両腕を広げる。

「悠々と大空を飛んで行く。それを追うメガネの小学生——」

「それ、明智君が江戸川君になっただけやし」

「あ、巧い。座布団一枚」

男達はなぜかほっとしたような顔になって、口々に大仰な溜息をついた。

「ええ、続きまして……」

「まだ、あるんかい」

投げやりにツツコンでユウやんはマンゴープリンに専念し始める。

シュツと布の擦れるような音がする。

「御大にも登場してもらいましょ……」

しのぶの言葉は途中で掠れて語尾がかき消えた。カウンターに何かが置かれる音がした。

「あの……」

その声にユウやんはハッと振り返った。髪を胸まで垂らした二十歳の娘が思い詰めたような眼差しできっかりとユウやんを見詰めていた。その手元には銀縁メガネと桜色のリボンが置かれている。奥二重の瞳の上で微かに長い睫毛が震えているように見えた。

※

雨は降り続けている――

インターフォンが鳴った。『はあい』と声を上げて弥生は玄関に向かった。キッチンを抜けたところでインターフォンが二度、三度と連打される。

「はいはい、ちよつと待ってよ」

翔が寝てるのに……、思いながら我知らず声が大きくなった。インターフォンを鳴らす指が苛立っているのは弥生の出迎えが遅いせいではない。こんな時間には帰宅する自分の境遇に苛立っているのだ。自分をそんな境遇に追いやってしまったと思っている職場の人達に苛立っているのだ。

根がポジティブ志向で現状を現状として受け止める質の弥生は現状を鬱々と悩んでいる亭主を冷めた目で見ていた。帰宅の度にインターフォンに八つ当

たりするのは子供染みている。晩酌を啜りながら益やく体たいもない愚痴をこぼされるのはいい加減煩わしい。もう決まったことなのだから新しい職場でどう働くか前向きに考えれば良いのに。

玄関を開けるとコート姿の康男が立っていた。

「丁度良かった。悪いけどちよつとお父さん見て。電球が切れたからコンビニまで行ってくる」

弥生は言うだけ言うと返事をする間も与えず、すれ違いに家を飛び出した。

※

「靴の問題が……」

しのぶは齒切れ悪く言葉を切った。

「解決できないんです」

「どういうこと？」

ユウやんがマンゴープリン最後のひと掬いを口に入れながら尋ねた。

「バリキさんの推理もマスターのもわたしのも揉み合った末に西本さんが転落したという点で本質は同じです。その切迫した状況で犯人はどうやって靴を脱がせたのでしょうか？」

男達はしのぶの言葉を咀嚼しているかのようにしばし沈黙していた。

「脱がせたやのうて脱げたということはないやろか」

バリキが尋ねる。

「ご自分の靴ですよ。サイズがぴったり合っている靴は簡単に脱げません」  
誰も反論しなかった。

「センセの推理はなおのことです。その状況で西本さんが靴を脱ぐ理由がありません」

しのぶは一息つくように猪口を煽った。

「もちろん転落した後、一階まで降りて西本さんのところに行き、靴を脱がせて屋上まで持って上がればこの状況を作るとは可能です。でもどこで誰に見られるかわかりませんし、予期せぬ何か起きるかもしれない。リスクが高すぎます。そこまでして、靴を屋上に置く必要性やメリットがありません。確かに屋上に靴がある方が自殺らしく見せかけられるかもしれない。でも、靴を履いたまま転落していても自殺を否定するほど不自然な状況じゃないですよ。それに……」

また猪口に口をつけて、しのぶは新しい格子戸の外に目を遣った。雨の降りが強くなっている。

「その日は雨が降っていましたが。靴を脱いだら靴下に水が滲みて気持ちが悪く、何より冷たいです」

十一月の夜は寒いです——としのぶは言った。

「西本さんの死が自殺だとしたら飛び下りる前に靴を脱ぐだろうか？って、自殺に疑問を抱く刑事さんもいるかもしれません。屋上に靴を残すことはむしろ藪蛇になりかねません」

店全体が耳をそばだてている。いよいよしのぶが事件の核心を語ろうとしているのが、ひしひしと伝わってきた。

「それでも靴はそこにありました。自殺にしても他殺にしても不自然に思えるのに、靴は揃えて屋上に置いてありました。それには何か理由があるはずですし、しのぶはまた猪口に口をつけた。」

「牡蠣のしぐれ煮……」

出し抜けに意外な言葉がしのぶの口をつく。

「なんやて？」

ユウヤンが聞き返した。

「ずっと考えてたんです。どうやったら身縮みさせずに味をしつかり染み込ませられるか。あの味、母が作るしぐれ煮にそっくりなんです。結局、作り方を教わる前に母は亡くなってしまったのでわからずじまいで、だから余計に気になって実は今日わたしそのことばかり考えてました。どうしても分からなければマスターに無理を押しつけて教えて下さいってお願いしようかと思っていました」

「わかったん？」

カウンターの向こうで腕組みをしていた主人が目を細めてしのぶを見る。

「はい」

しのぶはきっかりと頷いた。

「最初は、何か料理の手順や調理法に秘密があるのかと思ってそればかり考えていました。わたしも身縮みを抑えるコツをいくつか知っています。最初にさつと火を通して煮汁を煮詰めてから絡ませるのが一番メジャーですけどそれでももつと身が縮みます。片栗粉を多めに塗すというのも聞いたことがありますが、それだと煮汁にもつととろみがついてしまいます。きつと、わたしが知らない秘伝のテクニクを使われたんだろうと思ってわたし、行き詰まってしまったんです」

しのぶは目の前の牡蠣がなくなった小鉢をじっと見詰めた。

「牡蠣を全部食べてしまった残った煮汁の香りを嗅いだとき。なんだか、とても馴染みのある匂いがしたんです。和食ではなくて、中華の……」

しのぶは顔を上げてマスターを見遣った。

「その匂いに気付いた時、わたし大きな間違いをしていることに気付きました。秘密は手順や調理法には何もなかったのです。寧ろ、調理法は当たり前前に牡蠣に必要な最低限の火を通しただけ。だから身が縮んでいなかったんです。秘密は

調味料にありました。仕上げに——オイスターソースを少し加えたんですね」

「よう……、わかったな」

主人は無表情のまま呟いた。

「オイスターソースは牡蠣を塩茹でした煮汁から作られる調味料で牡蠣の旨みがふんだんに含まれています。だから、このしぐれ煮の煮汁は濃厚な牡蠣の味がした。それで、わたし達は牡蠣にすっかり味が滲みっていると錯覚してしまつたんです。ある意味、卑怯な気もしますけど巧妙なトリックだと思います」  
言つて、しのぶは元氣のない笑顔を見せた。

「あの、しのぶちゃん」

ユウヤンが遠慮がちに言った。

「想い出のレシピの謎解きやつてるところ悪いんやけど、西本の話が中途のま  
まやで」

言われたしのぶはじつとユウヤンを見詰めた。射るような視線を受けかねてユウヤンは目を逸らしかけたが、思い直したように踏みとどまってしのぶを見返した。桜色の小さな唇が微かにわなないた。

「それと同じ過ちをわたし達は犯していたんです。その夜、屋上は密室だった。西本さんが誰かに殺されたのだとしたら、犯人は密室を構成するために何らかのトリックを使ったはずだ——そうわたし達は考えて、次々に思い付く犯人像



とトリックを挙げていきました。でも、こう考えたらどうでしょう？会社の屋上から転落したということを示す物的証拠はその靴だけです。もし、その靴がなければ会社の屋上から転落した確証は何もありません。けれど、その靴こそが転落した場所を錯覚させるためのトリック——この事件のオイスターソールスだとしたらどうでしょう？だとしたら、密室の謎を推理するのは徒労以外の何者でもありません。だって逆説的に考えて、西本さんが転落したのはそのビルでなかったということになりますから」

「いや、それでも、犯人が靴を脱がせて屋上に残すメリットがないことには変わりはないのではないですか？」

センセが考え考え反問する。

「たとえば、ずっと遠くの場所で西本さんが転落したとしてその場所を知られたくないという犯人が考えたとしても死体を会社の裏手の路地まで運んだ時点で現場の偽装は完結しています。わざわざ危険を冒してまで靴を屋上に持つて上る必要はありませんよ」

しのぶはユウヤんから視線を外す領いた。

「わたしもそこにひっかかりました。それで、わたし牡蠣のしぐれ煮の時と同じように発想を逆転させてみたんです。靴は脱がされたのではなく、履かせられなかつたんじゃないか？って」

「どういうことですか？」

「転落する直前、西本さんは靴を脱いでいた。靴を脱いだ状態で西本さんは転落した。犯人が靴のことに気付いた時には西本さんの靴下はずぶ濡れ、その上から靴を履かせたら不自然になってしまいます。靴を履かせるには靴下を脱がせて、丁寧に足を拭いて、新しい靴下を履かせるという手順を踏む必要があります。その過程で警察の科学捜査で炙り出される不自然な何かを遺してしまうかもしれないと犯人は考えた。けれど、死体を会社の前の路地に移動させたとして靴がどこにもなければ警察は事件として扱うでしょう。そこで犯人は苦肉の策として履かせられなかった靴をあたかも自殺を前にして脱いだかのように会社の屋上に置くという偽装をした——証拠はありませんけど、こう考えるとしつくりします」

しのぶは猪口を煽ってから続けた。

「転落現場が会社の屋上ならばこの考えは無意味です。けれど、靴がフェイクだと考えて別の場所で西本さんは転落したと考えると意味を持ちます。習慣的に靴を履かないスペースで高所から転落する可能性のある場所。そして、犯人が隠匿したいと考えるであろう場所をわたしは一つ思い付きますから」

一呼吸間を置いて、しのぶは再び口を開いた。

「西本さんのご自宅……マンションです」

しのぶは猪口の中身を空けてから続けた。

「西本さんは三大家族で息子さんはまだ三歳です。遺体を運んだのも靴を屋上に置いたのも、お一人しかいらっしやいません」

しのぶは言葉を切った。明らかにしのぶは核心となる言葉をユウヤン自身の口から語らせようとしている。

「西本の嫁さん……弥生ちゃんいうことか」

※

雨は降り続けている――

それでも止めるわけにはいかない――。冷やかに康男を見下ろしながら弥生は思った。息をしていないことは確かめた。ならばやるしかない。康男の腋に腕を入れると渾身の力を振り絞って引き擦った。ごみ捨て場のボックスの陰にあそこなら駅から帰宅する人は前を通らないから暫くは気付かれない。

一メートル引き擦ったら息が上がった。二メートル、三メートル、腕が痺れて何もかも投げ出したくなった。五メートル。ようやくボックスの前に差しかけた。

黒い傘を差した背広姿の男が見えて弥生は慌ててボックスの陰に身を屈めた。やがて傘が雨を弾く音が近づき、遠ざかる。傘を閉じようとしているのだろう。やかましく傘を開閉して水を振り落としている音が聞こえた。やがて靴

音が遠ざかり辺りは静かになった。

ゆっくりと十まで数えてから作業を再開する。なんとかボックスの陰まで引き擦って来れた。弥生はどうにずぶ濡れになっていた。

駄目だ——自分一人では最後までやりおおせるのはとても無理だ。言いようのない虚脱感に押しつぶされそうになる。ふと康男の足元を見て弥生は愕然となった。靴を——履いていない。追い打ちを喰らってその場にへたり込みたくなった。ともかく応援が必要だ——。弥生は振りしぶく雨の中、駆け出した。

※

「それは弥生ちゃんが西本を突き落としたいうことか？」

ユウやんの声は尻すぼみに小さくなり、語尾が震えた。

「わかりません。ただ、遺体を動かして転落現場を偽装したとすると、転落自体にも関わっている可能性は高いと思います。はつきりしているのは、マンションから転落した康男さんの遺体を弥生さんは会社の裏手まで運んだ。車を使ったんだと思います。そして次の朝、始業前の混み合う時間帯に出勤する人達に紛れて屋上に上がり靴を置いたんです」

しのぶはまた少し猪口を傾けてから続けた。

「恐らく、靴は死体を運んだ時に屋上に置こうとしたんだと思います。ところがICカードがないとビルに入れないことに気付いて断念し、朝を待ちました。

ですから、案外その時間帯は屋上が密室になっていることなんてご存じなかったのかもしれない」

しのぶは疲れたような溜息を吐いた。そういえば、しのぶは謎を解く時いつも笑顔を浮かべていた。笑みを口元から消して謎を解くしのぶを見るのは初めてかもしれない——ふとバリキはそう思った。笑みを引っ込めたしのぶの表情は淋しそうだった。

バリキの隣で、センセはしのぶの説明を聞きながら空になった紹興酒のグラスを手の中で弄んでいた。しのぶの説明が終わった後もしばらくセンセは逡巡していたようだが、やがて意を決したように口を開いた。

「で、ユウヤンはこれからどうされるのですか？」

※

雨は降り続けている——

「お姉ちゃん、落ち着いてよく聞いて。私、康男さんと入れ違いにコンビニに電球を買いに行ったの。それで帰って来たら何があったのかはわからないけれど、康男さんとお父さんがベランダで揉み合っていて……。そう、はずみで康男さんが落ちちゃったのよ……。ううん。亡くなっているのを確かめたわ……。でも、あれは事故よ……。そんな……。お父さんを裁判にかけさせたりしたくない……。わかってるよ。でも、手伝って……。お願い」

『お願い』と言い放つと弥生は電話を切った。二十分後、インターフォンが鳴った。ドアを開けると姉が立っていた。

「車に乗せるところだけ手伝ってくれば良い。後は私がやる」  
「どうするつもり？」

「康男さんの会社の裏手に死体を置いてくる。今日、康男さんは帰って来なかった。会社の屋上から飛び下りて死んだことにする。お父さんを殺人犯にすることなんてできないよ」

「馬鹿なことは止しなさい。警察には康男さんがベランダから飛び下り自殺したとだけ証言すれば良い話じゃない」

「父さんがマンションに入るところを管理人さんに見られた。部屋にいたことが知れたら警察は父さんも尋問するよ。姉さんも見たでしょ、父さんひどく取り乱してる。いくら認知症の患者の証言といたってあれを見たらただの自殺じゃないって警察は気付くよ。だから、自殺の現場を別の場所にしたいの」  
姉は黙りこくっている。その目は降りしきる雨をじつと見詰めているように見えた。

「わかった。手伝う」

唐突に口を開くと姉はきっぱりとそう言った。一旦決断すると姉の行動は速

かった。この辺りは姉妹でよく似ている。車を目立たないスペースに回し、後部座席にビニールシートを敷くと二人で康男の遺体を持ち上げた。

「靴はどうするのよ」

足首を握ろうとして姉は康男が靴を履いていないことに気付いた。

「履かせようとしたけど無理。絶対ぼろが出ちゃうよ。仕方がないから、会社の屋上に置いてくる。揃えておいておけば自殺っぽいでしょ」

姉は一緒に行って手伝うと言ったが弥生はきっぱりと断った。

「お父さんを看る人がいる。あと、翔もお願い。今から二人を連れて帰って」

※

ユウヤンは主人と客達の視線を浴びて酸っぱいものを噛み締めるような顔になり、目を逸らした。

「悪いんやけど、今日わしはこの店に来なかった。みんなも西本の話は聞いてない。そういうことにしてくれ。この通りや」

ユウヤンは深々と頭を下げた。

「いや、それはできん相談や。わかってるか？ やってしもうたことをなかったことにしてくれて、ユウヤンは言うてるねんで。少なくとも俺は呑めん。罪は償うべきや」

「バリキの言う通りですよ。そう言うのは友達がいとは言いません。第一、こ

のまま目を瞑ったら、ユウヤンはもう二度とその弥生さんに顔を合わせる事ができなくなりましたよ」

センスもたたみかける。それでもユウヤンは頑なに首を横に降り続けた。

「理屈はわしかてわかってる。けどな、弥生ちゃんを犯罪者にするわけにはいかんのや。翔ちゃんはまだ三つやで。父親亡くしたばかりやのに母親を犯罪者にしてしまったらあの子はどないなるねん」

言ってユウヤンはカウンタに肘をついて両手で頭を抱えた。

「それこそユウヤンの出番ちゃうんか。たとえ一人ぼっちになっても、最強のトラブルシューターがバックアップしてくれたら、これ程心強いことはないで」  
それでもユウヤンは首を縦に振らなかった。

「わしにできるんは翔ちゃんの生活を支えてやることだけや。心を支えてやることはできへん。誰も母親がおらん寂しさを埋めてやることなんかできへんねん」

『それができるんは弥生ちゃんだけや』——語尾が震えた。その語調に声を奪われたように客達は黙り込んだ。

「ユウヤん」

主人が口を開いた。その顔はかつて見たことがない厳しい表情を浮かべていた。



「この店の店主として言わせてもらおうで。ユウやんの気持ちはようわかる。俺はユウやんのそういうところ好きやで。それはここにおる皆さんかて同じやろ。けど、バリキの言う通りや。やってしもうたことをなしにはできん。いや、弥生さんのことを言うてるんやないで。ユウやんのことや。ユウやんは今日ここで西本さんの事件のことを喋ってしもた。結果的にしのぶちゃんが説得力のある答を出した。それはもう五人の人間が知ってしもうたことや。それを聞かんかったことにしてくれ言うても無理な相談や。皆さんわだかまりが残るわ。俺は店の主人としてお客さんに気分よう帰って頂く責任がある。そやから、俺が憎まれ役になるわ。しのぶちゃんの説が当たっているかどうかは分からんけど明日の朝一番で警察署に行く。今日ここで話されたことを全部そのまま伝える。その上で、一度その前提で事実を確かめてくれとお願いしてみるわ」

ユウやんは普段へらへら笑っている風貌からは想像もつかない凄味のある目で主人を睨んだ。が、主人も怯むことなく意志の固さを目顔で示した。

誰もが叫び出したい衝動に駆られながら沈黙を破ることが憚られるもどかしさを感じている。店の中はかつてない居心地の悪い空気に包まれていた。

「あの……」

遠慮がちにしのぶが口を開いた。

「はい、しのぶさん」

センセが継<sup>つ</sup>るようにしのぶを指した。

「もう少し良いですか？」

その一言に済<sup>す</sup>われたかのように店の空気が緩んだ。ユウやんが黙って頷くのを見てしのぶは口を開いた。

「この事件には、今ある情報だけでは分からないことが沢山あります。まず転落の状況は全くわかりません。弥生さんが転落に関わっていたかどうかともわかりません。分かっているのは転落した場所が恐らく西本さんのマンションだろうということだけです。でも、それよりも大きな謎が、……ずっと気になる謎が二つあるんです」

しのぶは客達をひとわたり見回した。

「その謎の答はわたしにもわかりません。たぶん、その場にいた弥生さんにかわからないことじゃないかと思っています」

そう断ってしのぶは話を続けた。

「一つは康男さんはどうやって転落したのかということ。マンションのベランダって高い柵があつて人が簡単に転落しないようにできていますよね。事故にせよ殺人にせよ転落するためには康男さんが柵を越える高い位置にいないと容易に突き落とすことなんてできないんです。それこそ、康男さんよりずっと大きな体格で力が強いレスラーかお相撲さんでもなければ不可能です。じ

やあ、康男さんはそんな不安定な体勢で何をしていたのが謎です。かといって、康男さんが自殺したとすると転落現場を偽装した理由がわかりません。変な言い方ですけど警察に通報すれば済む話です。偽装の動機を強いて挙げる とすれば自殺の動機に繋がった会社に対する抗議でしょうか？でも、小さなお子さんがいらっしやるのに、死体遺棄の罪を犯してまですることとは思えませんが

しのぶは言葉を切って再び口を開いた。

「二つ目の謎は天秤のもう一方に何が載せられたのかという謎です」

客達が怪訝そうな顔をした。しのぶは猪口を干して話を続ける。

「改めて伺いますけど、西本さんご夫妻って格別夫婦仲が悪かったということはないですよね」

「それはないで。そら夫婦喧嘩の一つや二つやらかすことはあったやろうけど、十周年パーティーやるくらいや、おしなべて円満やったと思う」

それを聞いてしのぶは何故か溜息をついた。

「でしたら、夫の亡骸を雨ざらしにするのに抵抗感がなかったはずがないですよ。ね。相当な逡巡や躊躇があつて当たり前です。でも、現実にはその夜のうちに決断を下して、夫を雨ざらしにしてまで現場を偽装しています。この決断の早さは決断の後押しをした何かの存在を示唆していると思うんです。弥生さん

は夫の亡骸を雨ざらしにすることと何かを天秤にかけて、その結果天秤はその何かに傾いたんだと思います」

息苦しくなったのかしのぶは言葉を切って、また猪口を傾けた。

「それが何かは分かりませんが、どういった性質のものかはある程度推測できます。その性質は大きく二種類に分けられます。一つは、天秤の他方を下げる性質のもの。たとえば、夫の亡骸を雨ざらしにしても守るべき大切な何かです。もう一つは雨ざらしにすることへの抵抗感を奪い天秤の均衡を変えてしまうもの。たとえば：、ユウヤンには申し訳ないのですけど、可能性の問題として考えるならば康男さんへの憎悪といった感情です。夫婦仲は普段から悪くなかったということですから、その夜、恐らく転落死に絡む何かが弥生さんの憎悪を一瞬の内に沸騰させたというのがありそうな可能性だと思います」

「可能性というだけならあり得る気はする」

ユウヤンは考え考え言った。

「弥生ちゃんはおっとりしてるけど芯の強い娘や。それにどないな逆風が吹いててもポジティブに物事を考える強さを持ってる。けどな、そのポジティブシンキングは諸刃の刃やねん。逆風をはね返すためなら手段を選ばんところがある。そして何よりネガティブな発想をする人間に対してえらく冷とうて、斟酌してやる寛容さに欠けてるように思う」

ユウやんの言葉に力を得たように頷いてしのぶは居住まいを正した。

「私からもお願いします。警察に行つてありのままを話すよう弥生さんを説得して下さい」

しのぶはじつとユウやんを見詰めた。ユウやんは再び表情を硬くした。

「お願いする理由は二つあります。一つは弥生さんが抱えている心の疵が心配だから。弥生さんが天秤にかけたものはとてつもなく重いものだったと思いません。その夜の時点では弥生さんはベストの選択をしたと自分に言い聞かせたことでしょう。でも、時間が経つにつれてその選択が弥生さんを苛んでいるのじやないかと心配なんです。なんて酷いことをしたのだろうと今になって自分を責めているのじやないかと心配なんです。最悪の場合、弥生さんは心を病んでしまうこともあり得ます。それを避けるには全てを告白して心を軽くするしかないんです。取り返しがつかなくなる前にどうか弥生さんを説得して下さい」

口をへの字に曲げてユウやんはじつと考え込んでいた。

「説得をお願いするもう一つの理由は、もつと切迫していて現実的な問題です。康男さんの靴は翌日になって屋上に置かれました。つまり前夜の雨に晒されていません。ということは、その屋上で雨ざらしに遭っていれば有しているはずの科学的特徴を持っていないんです。逆に前夜、靴があつた場所で、その屋上ではあり得ない特徴を備えてしまっているかもしれないかもしれません」

しのぶは軽く猪口を煽って続けた。

「楽観的に考えれば自殺として処理されようとしている事件で科捜研はそこまで精密な検査を行わないかもしれませんが。でも、目端の利く方が精密な検査を行ったら、弥生さんの偽装は間違いないと総崩れになります。現場を偽装したことが発覚すれば早々に証拠が固められて逮捕されてしまいます。そうなったら弥生さんは自首する機会を失くしてしまいうんです。裁判だって不利になります。ですからそうなる前に、自首のチャンスがあるうちに弥生さんを説得してあげてほしいんです」

しのぶは立ち上がって深く頭を下げた。ユウヤンはその長い髪が膝にかかるのをじっと見ていた。

「……しのぶちゃん」

長い間の後、ユウヤンは口を開いた。

「あんた、ネゴシエイターになれるわ」

言って、ポケットから携帯電話を取り出す。しばらく操作してからユウヤンは耳に当てた。

「……もしもし、あ、弥生ちゃんか。わしや……。遅い時間で申し訳ないけどちょっと話があるねん……。うん。今日中の方が良えと思うてる。善は急げ言うしな」

いつもの調子でユウやんはへらへら笑った。

「……うん、二十分くらいで着けると思う。……。こっちこそ。よろしうに」  
携帯電話を切るとユウやんは深い溜息をついた。

※

雨は降り続けている――

弥生が出て行って部屋には康男と義父だけが残った。義父はいつものように焦点の定まらない目でぼんやりと宙を見ている。

「なんや最近、弥生にもすっかり愛想尽かされてるみたいですよ」

背広のまま大儀そうに椅子に座ると康男はこぼした。義父は無反応である。それを承知で康男は喋り続けた。

「俺は根っからのエンジニアなんです。コンピュータの職人や。営業に行けい  
うんは俺に死ね言うのと一緒ですわ。けど、なんぼ言うても弥生にはそれがわ  
からんらしい。二言目には家族、家族。男の仕事をなんやと思うてるねん」

相変わらず義父の目は濁ったままで何を映しているのか定かではない。義父  
は東京の下町の出身で職人氣質かたぎで鳴らした腕の良い大工だったそうだ。だが、  
今の義父から往時を窺う術はない。

「俺、会社辞めようかなて思うてるんです」

椅子が軋む音がして顔を上げた康男はぎよっとした。義父がじっとこちらを

見ている。

「辞めて——どうしなさる」

義父は塩辛声を張って睨めつけるように言った。康男は狼狽えた。いつもの義父とは明らかに違う。

「仕事のアテはあるのかい」

「い、いや、それはこれから考えますけど、どこへ行っても食っていけるだけの腕は持つてるつもりです」

義父の声の凄味に気押されて、つつかえながら康男は答えた。

「この不景気にそうそう職が見つかるもんかい。悪いこた言わねえ。今の仕事を続けなせえ。まずは家族を食わしていくのが先だ」

義父の言葉は容赦がない。

「しばらくは貯金でも凌げます。俺は食うためだけに仕事をしてるわけやないんです。これは職人としての俺のプライドの問題や。弥生には理解できんみたいやけど、お義父さんやったらその気持ち分かるでしょ」

義父の豹変に戸惑いながら康男は奇妙な高揚感を味わっていた。が、当て外れなこと義父は康男を小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「お前さんやっぱ仕事を辞めちやいけねえ。今の仕事にしがみついても離れちやなんねえ」



お題目でも唱えるように小さな声でそう呟いていた義父が次の瞬間吠えた。「家族を食わせてやれもしねえ男が偉そうに矜持云々と語ってるんじゃないやねえ。お前さん今、矜持のためなら弥生や翔がひもじい思いをしても構わねえってそう言ったんだぜ。お前みたいなのを半ちくくってんだ」

半ちくくという言葉で康男は聞いたことがなかったが言葉の勢いから自分が半人前だと罵られたと察した。『半人前』——その言葉が浮かんで康男の頭に血が上った。

「ちよつと待て。その言葉取り消せ」

相手が認知症の老人であることも忘れて康男は怒鳴った。

「俺は技術なら職場の誰にも負けへん自信がある。それに仕事で手を抜いたことは一度もあれへん。俺が関わった仕事は『西本ブランド』って呼ばれて、万に一つの間違ひもないと専らの評判や。そのどこが半人前や言うねん」

康男の剣幕に気押される素振りも見せず義父は訥々と言った。

「お前さん何のために仕事してるんだ。腕を見せびらかすためかい。周りにお前さんの腕を褒めてもらうためかい」

予想外の言葉に康男はたじろいだ。

「だったらその仕事はガキの遊びと変わらねえ。親に褒めてもらいたくて子供が一所懸命に勉強すると変わらねえ。手抜きをしたことがねえだ？」

義父は凄味のある目で康男を睨み付ける。

「当世じゃそれを職人の仕事っていうのかい？ 銭もらって仕事してんだ。手え抜かれちゃ先様もたまらねえだろうよ。さつきから聞いてりゃあんた銭に関してえらく浮世離れしてるね。仕事辞めても食っていけるだの、銭より職人の矜恃が大事だの。生まれてこの方、銭で苦労したことがねえ奴が言いそうな言い草だ」

康男の前にいる義父は今や壮健な男にしか見えなかった。義父は不意に表情を和らげて静かに言った。

「そもそも、お前さんが自慢にしているその腕を見込まれて営業に移るんだそうじゃねえかい。弥生が姉貴に喋っているのを聞いたよ。だったら一体何が不満なんだい」

義父の言葉が上司の内村の言葉と被った。内村もそう言って康男を説得したので。

「技術は語るもんやのうて振るうもんです」

同じ反論を康男は口にしたが義父は鼻で笑った。

「屁のつっぱりにもならねえな。銭頂けるんなら何やったって構わねえだろうが」

「さつきから聞いたつたら金の話しかしませんね。お義父さんには職人のプラ

イドとかないんですか？」

「家族にひもじい思いをさせてまで守らにやらねえ矜持なんてあつてたまるかよ。そんな余計なもんは金輪際捨てちまいな。そんなガキのおもちやみたいなもんのために弥生や翔がひもじい思いをしようもんなら、俺はお前さんを許さねえよ」

弥生と一緒だ。やはり親子だ。親子して俺の仕事を、仕事に対する情熱を小馬鹿にしやがる。

「なんでやねん。なんでそこまで何でもかんでも俺一人で背負わされて犠牲にならんとあかんねん。多少ひもじい思いをしてでも亭主を支えるのが女房ちゃうんかい」

義父は立ち上がると繰り言を呟き続ける康男の腕を乱暴に引っ張って窓際まで引き擦って行った。やにわにサツシの窓をひき開ける。高層マンション特有の強風が十一月に降る雨を孕んで吹きつけてきた。

「頭を冷やしな。そして考えるんだ。本当に大事なことが何なのか。よおく考えな」

「わかりませんわ。男は仕事が一番大事や。なんで家族の犠牲になって納得のいかん仕事をやり続けんといかんのです？」

「それが男つてもんだらうが」

義父は静かに言った。

「男はそうやって一生家族を守って生きてくもんだろうが。今のご時世、やれ自分がねえの、生きがいがどうのとめんどくさいことを騒ぎやがるから、お前さんみたいに頭がこんぐらがった若いのができちまうのかもしれないねえな」

「俺は……」

康男は俯いて黙りこくった。

「そんないやや」

出し抜けに子供染みた声で叫ぶと網戸を引き開けて康男はベランダに飛び出した。エアコンの室外機に飛び乗ると片足を柵の上端にかける。

「馬鹿野郎。お前が死んだら弥生や翔はどうなる。了見違いも大概にしろ」

「家族、家族、もう聞き飽きましたわ。家族を守る前に俺にはもっと大事なもんがある。それをよってたかって取り上げようとしやがって。お前らみんな好き勝手するんやったら俺も好き勝手させてもらおうわ」

吹き降りの雨に濡れまみれながら康男は半狂乱になって叫んだ。

「この半ちく野郎。どういう了見で所帯を持った。弥生と結婚した。翔を作った。男の責任を果しもせず勝手に勝手に幕引くことが許されるとでも思ってたのか」

だが、義父の叫び声は康男に届いていない。康男は惚けた顔になって焦点の合わない目で暗い中空をぼんやりと見詰めていた。やにわに室外機を飛び下り

て部屋に戻ると康男は義父を突き飛ばした。不意をつかれた義父はダンスに強か腰をぶつけて呻いた。康男は苦しげに唸っている義父を置き去りにして寝室に飛び込んだ。

「あんたの理屈やったら、これで良えわけですやろ。翔も連れて行ったら俺が死んでもひもじい思いせんで済みます。弥生はもう大人やから一人ででも食っていけるでしょ」

必死に身を起こそうとする義父を尻目に翔を抱いた康男は再び室外機に飛び乗った。眠りからいきなり引き戻され吹き降りの雨に晒された翔は火がついたように泣き叫んでいる。

「馬鹿……野郎」

「もう説教は聞き飽きましたわ」

笑い混じりに言っつて康男はベランダの柵に足をかけた。玄関で重い扉を開け閉てする音が聞こえた。リビングに顔を出した弥生の目に半狂乱の男が翔を抱えて今しもベランダから飛び下りようとしている姿が飛び込んできた。

金切り声がほとばしる。

その声に弾かれたように義父が跳ね起きるとベランダに飛び出した。渾身の力を込めて康男の腕にしがみつく翔を引き剥がしにかかる。奪われまいとして腕に力を入れた康男は足元が不安定なことを忘れていたのだろうか。義父が

翔を引き剥がしたはずみにバランスを崩してベランダの向こうに消えた。弥生は父に駆け寄ると翔を抱き取った。それからベランダの端に寄り真下を見下ろす。

動かなくなつた夫が地面に横たわっていた。冷たい雨が髪を濡らすのも厭わず弥生は長いことそれを見下ろしていた。

やがて気を取り直して部屋に戻ると翔を布団に横たえて弥生は部屋を飛び出した。

どうしよう。どうしよう。どうしよう……

死ぬなら一人で死ぬ。死ぬなら一人で死ぬ。死ぬなら一人で死ぬ……

何かの呪文のように二つの想いが言葉となって胸の中で渦を巻いている。二つの想いをやがて一つの決意に変えながら弥生は非常階段を駆け下りて行った。

※

「うわっ、本降りやな」

格子戸を開けたユウやんは黒い傘を外に差し掛けながら言った。

「十一月に降る雨は雪にらん分、質たちが悪いねん。うっかり濡れたら体を冷やして風邪をひいてしまいうや」

呟くようにそう言うと格子戸を潜って外に出る。閉められた格子戸の向こう

で大きなくしやみが聞こえた。客達と店主はしばらくの間、真新しい格子戸をじっと見詰めていた。

（第六夜 了）